



講習会で配布された資料に熱心を目を注いだ出席者たち

が生まれた。演野さんいわく、「日本の中学生より運動能力が格段に低い。小学生時代の運動経験の少なさが影響しているんじゃないかと思ったんです」。モロッコの小学校では、週2回、体育がカリキュラムに組み込まれている。しかし、体育用具がない、教えられる人がいないなどの理由を以て、ほとんど授業が行われていないのだ。

「小学校にも体育を普及したい」。そう考えた3人は、自ら活動の場を小学校にも広げていった。しかし、「体育なんか必要ない」と考えている先生が圧倒的に多い中で、一人一人の意識を変えていくには時間がないという。できないからやらないというのではなく、体育の重要性を分

かしてもらいたい。まずは先生たちが問題を共有し、共に考える場を。そこで演野さんらはそれぞれの活動地で「体育講習会」を開催することにした。

**体育講習会では、日本のノウハウを伝える。**

2月17日、根野さんの活動地、シヤウアで体育講習会が開催された。出席者は彼の呼び掛けで集まった、小中学校の先生、教育支局の関係者ら50人近く。教育支局のアフアラビム・モクタディ学生課長も「国として2012年まで緊急プランを策定し、小学校で体育が実施できるよう、ラインフラを整備を進めています。モロッコの未来を担う若者を育成するために、規律と仲間を教える心が学べる体育は重要講習会を通じて、一人でも多く先生が関心を持ってください。まずは3人の隊員より、ビデオ表を用いて、日本の体育教育についてプレゼンテーションが行われた。根野さんらは、巡回先の一つ、イブン・シムラ学校のエルマヌアディ・カリード校長は「子どもは身体的な成長を促すための体力テスト、学習カードを使って授業の振り返りな

ど、日本の授業は一つ一つの活動に興味がある。体育はスポーツである前に、教育なんだですね。見習えませんか。見たんさあります」と関心を示していた。

そして午後11前日は、その豪雨だった。その日は兎事に晴天。根野さんの教え子たちも協力を得、メダカスクール版鬼ごっこ、クラブ、ドッジボールといった遊びなどの実技が披露された。その競技も、ちょっとした工夫があれば、子どもたちの運動能力を最大限引き出すことができます。体育は、子どもたちがどこまでできるか、先生たちが何かのヒントを得ることができた。

子どもたちが健全な成長できるための体育教育を、講習会を通じて、モロッコに先生たちが3人の協力隊員とともにその思いを確かに胸に刺繍していた。ブッサリ小学校のサヒビ・アブ

研一さんが体育隊員として奮闘していた根野さんを含む彼ら3人の活動先は、いずれも旧借款によって建設された小学校だ。IICAの支援を通じて、04年より、都市部から離れた5つの農村地域で101校の校舍が新設され、スポーツ用具などの物資も供与された。しかし、インフラだけあって、指導者がいなければ活動は成り立たない。そこで各地域の教育省支局に派遣されたのが、根野さん、演野さん、室井さんの3人だった。

赴任当初、彼らは週3回、1つの中学校を巡回しながら、現地の子どもたちに体育を教えた。しかしそのうち、一つの疑問

（上）体育講習会の出席者らに手作り体育用具を紹介する演野さん  
（左）子どもたちに指示を出す根野さん。何をすることも、まずはルールをしっかりと教えるから、実技に入るのが後の方針だ  
（右）日本の実技で建設されたシヤウアのアフアラビム中学校。[黒丸の生体のために女子兼も併設し、学校に通う子どもが数人が確保に増えた]とケリ・エルハッサン校長



ペットボトルと紙で作ったオリジナルの道具も、体育の授業を受ける子どもたち。すべては協力隊員のアイデアだ

**小学校で体育の授業が受けられない**  
「ビュート!!」  
コングリートのグラウンドに、青年海外協力隊の根野俊司さんの値が響き渡る。

「これからドッジボールを始めます!」  
子どもたちは慣れた様子で2つのチームに分かれ、早速ゲームが始まった。風の力によってボールを行き交うボール。ようやく1ポイントを獲得する子、真正面から

受け取る子、少し怖そうに逃げ回る子。どこにも見られない体育の授業風景だ。  
ここは、アフアラビム中学校だ。果て、モロッコ・根野さん、2008年6月から、世界遺産都市、マラケシュ郊外の町シヤウアで、中学校の体育の質向上を目指して活動を続けている。体育の授業はあるんです。指導者の育成やカリキュラムの構築、体育用具の不足と問題は山積み。体育を「教育」として定着させること。それが彼の活動です。

また時と同じくして、南部のインズガーンでは演野真成さんと、北部のテトウアでは室井



## 小中学校に 体育教育を広めよう

日本の小中高では当たり前前の体育の授業。しかし開発途上国では、進学と直接つながらない科目は後回しにされがちだ。モロッコも例外ではない。そこで立ち上がったのが、体育を指導する3人の青年海外協力隊員だった。



「モロッコの学校に体育を広めたい」。同じ信念を持つ、同世代(25歳)の室井さん(福島県)、演野さん(京都府)、根野さん(広島県) [左が]のチームワークが実を結んだ  
写真-久野真一(JICA広報室)

スポーツの力  
一人の力を育てよう一つの視眼



スーフ・キャンプの少年たちも、以前より真剣にサッカーの練習に取り組みよくなってきた

力隊の角田さん、グラウンドの少年たちの動きを見つめる学校の授業がすべて終わる夕方、10、16歳の少年たちを集め、基礎技術の向上やチーム練習などを行う。学校の時間が短く、公園などもほとんどない難民キャンプでは、少年たちが放課後の時間を無駄に持て余すことが多い。何かに一生懸命打ち込み、目標に向かって努力するという経験が、サッカーを通して角田さんには起きている。

たびたび角田さんは、チームの物はみんなが責任を持って大事にするという点、日常生活でもサッカーでも、相手への思いやりが大切だということに根拠よく伝え続けている。「最近彼らもようやく、もっと練習をしたい、試合に出たいと意欲を見せるようになってきました」と喜ぶ角田さん。当面の課題は、「毎回ちゃんと練習に出る」「一時間を守る」ことの徹底。「うまくなって試合に勝たないのなら、まずはこうした基本的なことから、試合結果よりその過程を経験し、成長していくことが大事なんです。その厳しさを丁寧に満たす指導は、今後、ますます熱が入りそうだな」。

生徒の心を育む  
より充実した情操教育を

近代的なビルが建ち並ぶ首都アママンの外れ、難民キャンプではないが、パレスチナ難民とその子孫が多く住むヌスバ地区にあるヌスバ第3女子中学校の一角は、まさに体育の授業の真つ中だった。

前転に取り組んでいる隣で元気な声を掛けるのは、体育指導を担当するシニア海外ボランティアの土岐恵さんだ。850人以上の生徒が通うこの学校、ここでも教員や校舎に対して生徒の数が多く、授業は午前と午後で分けられている。さらに、音楽・園工など、1年生の心の教育に欠かせない情操教育の一部が行われていない。体育は女性教員が一人いるが、授業のための用具が不足し、適切な指導も思うように実践できていない。そこで、土岐さんがパートナーとして、生徒が楽しみながらできる運動、体育用具の有効活用、授業計画の作成など、さまざまなアイデアを出していった。

イスラム教の国、ヨルダンでは、女性が人目につき場所を移動する光景はほとんど見られない。難民居住地のような閉鎖的な場所であればなおさらだ。球技の経験がなく、ボールを投げられる袖口がきかない子、縄跳びを一回も跳べない子も珍しく

(上) 体育の授業で生徒にマット運動を教える土岐さん  
(下) 断髪して断髪の日を祝す小学生たち。難民キャンプでは、体育の授業に適切な用具や場所が、まだまだ不足している

パレスチナ難民のための女子小中学校で、体育の授業を推進している土岐さん(右)と生徒。学校の外を休み期間には、近隣校とのドッジボール大会も企画した



つらい難民生活を  
乗り越えるために

「前へ出せ」「こつただ」  
コンクリートの簡素な集合住宅が続く町並みで、元気を声かけ響き渡る。町の一角にあるアスファルトのグラウンドで、少年たちが真剣な表情でサッカーボールを追い回している。

パレスチナ難民の  
青少年たちに希望を

スポーツの楽しみを知らずに育った少年少女に、体を動かし、仲間と力を合わせることの喜びを伝えたい。

JICAボランティアのそんな思いとともに、ヨルダンに住むパレスチナ難民の青少年たちが、スポーツを通してかけがえのない経験を重ねている。



最初の難民がヨルダンに移り住んでから半世紀以上、難民キャンプで生まれ育った少年たちの心の中心には、まだ強固な故郷パレスチナがある

と。ここは、ヨルダン全土に10か所ある難民キャンプの一つ、スーフ・キャンプだ。1967年の第3次中東戦争で逃れてきたパレスチナ難民のためにできたスーフ・キャンプの初めは荒野でのテント暮らしだったが、国連などの支援で建てられ、電気も使えるようにになってからは、病院や学校などが建てら

れ、キャンプは町となった。とはいえ、貧困や高い失業率、人口増加に伴う衛生環境の悪化など、人の暮らしは厳しい。学校も足りておらず、授業はやむを得ず午前と午後の二部制になっており、1人1日放時間程度しか受けられる。6月よりここです2009年、月よりここですサッカーを指導する、青年海外協



元団体選手の角田さん(2人左)と角田さん、その経験を生かし、難民キャンプの子どもたちにサッカーを教える